

令和元年6月24日現在

機関番号：14302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13262

研究課題名（和文）言語意識の高揚を促す英語の文法教授法に関する認知言語学的研究

研究課題名（英文）A Cognitive Linguistics Approach to Grammar Teaching to Foster Language Awareness Raising

研究代表者

児玉 一宏（Kodama, Kazuhiro）

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40340450

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近年の認知言語学研究の発展を背景に、英語の文法指導に活用する可能性が見込まれる有益な言語研究について分析を行った。言語運用能力の習得には、学習者に相乗効果を生むような方略を見出すことが重要であるが、同時に学習者にも一定の動機付けが不可欠である。言語意識の高揚、特に文法意識の高揚という捉え方の重要性に注目し、構文文法という認知言語学の言語理論がどのように寄与するかについて研究し「構文」という概念の有用性を検証した。また、小学校での英語の教科化が決まったことを踏まえ、初等レベルでの英文法の指導にどのように活用していくかという問題についても考究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、言語意識の高揚を図る英語の文法指導に関する研究であり、その意義は、中等英語科教育のみならず、社会的関心の高い小学校英語も視野に入れた研究を行った点にある。言語研究をテーマとする国際会議への出席などを通して、研究分担者ともども認知言語学や語用論の近年の研究成果に検討を加え、場面や状況というコンテキストとの関わりの中で文法指導を進めることの重要性を明らかにした点に学術的意義が認められる。また、現職教員との交流（免許講習などの実践も含む）を通して、特に小学校英語に寄与する文法指導のあり方に注力し、その成果の一部は、『小学校英語内容論入門』等の出版物において発表した。

研究成果の概要（英文）：Current theoretical linguistics such as cognitive linguistics has achieved a remarkable development, with a variety of useful results of linguistic research supposedly applicable to the teaching of English grammar. While teaching strategies producing the multiplier effect are clearly important contributors to the acquisition of language skills, at least some degree of motivation on the part of learners is also important. This study has focused on the point that language consciousness raising, in particular, grammatical consciousness raising in pedagogy, should be given a place in the language-teaching curriculum, considering the issue of how Construction Grammar can contribute to a better teaching of English grammatical constructions. English has been made a required subject in the elementary school curriculum. The issues under discussion with regard to the teaching of English grammar at the elementary level have also been given special considerations from a cognitive viewpoint.

研究分野：英語学

キーワード：言語意識の高揚 文法意識 与格交替 構文 小学校英語

1. 研究開始当初の背景

本研究では、コミュニケーション能力の育成を第一目標に掲げている日本の英語教育のあり方を背景に、具体的な場面や状況に則した英語の使用を可能にするためには、どのような文法の指導のあり方を考案する必要があるかという視点から、コミュニケーションに役立つ英文法の指導について検討を始めた。第2言語習得における文法学習には、学習者による「文法意識の高揚」(grammatical consciousness raising)が重要な役割を果たすことを前提とし、意識の高揚に繋がる具体的な文法指導とはどのようなものかという問題に焦点を当てることにした(特に、研究代表者児玉は、科学研究費補助金(基盤研究C)の研究分担者として「国語科の文法教育と英語科の文法教育の連携に向けての基礎的研究」(課題番号17530657、研究代表者 森山卓郎)に取り組み、国語科教育と英語科教育の連携に向けての基礎研究を行った。また、萌芽研究「英語の構文習得理論構築に向けての認知言語学的研究 - 免疫記憶のメカニズムの観点から」(課題番号18652047)では、研究代表者として、英語の構文習得研究(L1)と免疫記憶研究の分析的統合研究に従事した。以上2点の研究は、本研究の学術的背景として特記しておく。また、小学校での英語指導を射程入れ、英語の文法、構造、機能を効果的に指導するにはどのような問題意識と工夫が必要になるかという点についても考慮し、言語意識の高揚に繋がる英語の文法指導という括りの中で研究を進めていく見通しであった。

2. 研究の目的

中等英語科教育の現場では、コミュニケーション重視の英語教育が標榜されて久しいが、英語の文法指導には依然として「形式至上主義」(form fetishism)が根強く浸透しているように思われる。この傾向は「構文書き換え」学習に顕著に現れていると言える。たとえば、英語の授与動詞 *give* は二重目的語構文にも、*to* 前置詞句構文にも現れ、いわゆる「与格交替」を示すが、この特徴を“*give* AB *give* B to A”という書き換え規則によって理解させるとすれば、この指導法だけでは、構文を機械的に書き換えることに固執するあまり、単なる記号操作の習熟に終始することにもなりかねない。問題は、学習者がいったんこの規則を習得すると、間接目的語や前置詞の目的語に生じる名詞句の特徴や性質に目を向けなくなり、言葉の世界の不思議さや言葉について考察する楽しみを失うことなく、まるで数学の公式を適用するかのよう処理してしまう危険性が高いことにある。構文書き換え学習を積みにつれて、学習者の中には、そもそも単一の出来事を表すのになぜ2通りの構文が使用されるのかという疑問を抱く人も出てくるであろう。本研究では、このような疑問に対して、構文文法として知られている認知言語学研究および語用論研究に注目し、同文法理論の進捗を踏まえ、英語教育の接点について文法指導に関する独自の研究を進めることが主たる目的であった。同時に、小学校英語の必修化という教育課題に対応する意味で、初等英語科教育を視野に入れた英語の文法指導も射程に入れ、言語意識の高揚を図る文法指導のあり方を考究することにした。

3. 研究の方法

研究統括者および研究分担者が、それぞれに近年の認知言語学研究と語用論研究の知見について研究を行い、適宜、英文法に関わるテーマについて意見交換を行った。また、初等および中等英語科教育に携わる現職教員の協力により、現場の状況や課題などについての聞き取りを行い、言語研究の成果を英語教育へ活用する可能性について検討した。特に、研究協力者である多田保行氏には、中等および高等英語教育での実績に基づいて、言語理論の応用可能性について多大なご指導をいただいた。一方で、本研究に直接関わる最新の研究成果を学ぶため、国際学会(LSA: アメリカ言語学会)など、言語学の関連学会に参加し研究交流を深めた。特に、構文文法理論に依拠して言語習得研究の解明を図ろうとする A. Goldberg のグループの研究は、第2言語習得研究にも資すると考えられ、今後は最新の研究成果である *Explain Me That* 等を参考にすることで、本研究の更なる進展に努めていきたい。また、最終年度、特に小学校の現職教員を対象とする免許講習を担当した際には、過去2年間の研究を踏まえ、教育実践の現場から、小学校での文法の指導あり方について意見交換を行うなど、初等英語科教育にも一定の検討を加えた。

4. 研究成果

主たる研究成果は、教育現場での文法指導上の課題や問題点を把握したうえで、その解決に向けて、認知言語学の研究成果の活用の仕方を研究した点にある。特に、使用頻度の高い構文、統一的な説明が必要な文法・構文現象(与格交替など)に注目し、その教授法を具体的に研究するとともに、日常の授業実践でも一部提示することにより、理論と実践の往還に努めた。中等英語科教育に関しては、免許更新講習等、現職教員との交流の機会を活用しつつ、現場での指導上の問題や学習者にとって理解が困難とされる文法事象について、認知言語学との接点を見出す議論や意見交換を行うことで、学習者の言語意識の高揚を促し、英語の運用能力の向上に資する教育を実践できるのか、という根本的な問いに答えることに努めた。教育現場の状況

を勘案し、学習効果の点で期待値の高い知見を活用し、「隠し味」を効かせた指導法を基づくことで、以下のような教育的効果が生じることを期待している。第一に、文法指導において言語現象を統一的・体系的に説明することができる。第二に、これに付随して、学習者が文法の有用性を実感し、文法を理解することの面白さを実感することができる。第三に、学習者自らが運用面での成功体験を積み重ねることにより相乗効果を生む。これは自己効力感の涵養に資するという意味で特筆すべき事項である。以上、本研究では、認知言語学と英語教育学の融合を図り、文法指導に資する領域横断的な統合的分析の可能性を探った。

最後に、言語学において、言語の使用文脈と語用論を考慮する重要性については今更言うまでもないが、初等および中等の英語教育において、学習者の言語意識の高揚を図るには、この点を含めて“construction”の適切な活用が求められる。2018年度に実施した免許更新講習と英語免許講習の際に、これまでの研究成果の一部を示し、教育現場との交流の機会を得た。併せて、教育現場でも実際に活用できる教授法の考案のために、現職教員と問題意識を共有するとともに、建設的な意見交換を行った。特に、後者の15回の授業「英語学」の中で「英語学」の知見を初等教育の英文法の指導にどのように役立てるかについて考察した（現在、本研究の具体的な成果として公表準備中のものと印刷中のものもあるが、小学校英語に関しては、『小学校英語内容論入門』（研究社）の中で、英語教員として「文法」とどのように向き合うべきかについて「文、文法構造、文法の指導」として記している）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

著者：Tetsuharu Koyama

発表表題：Covert Evasion as Uncooperative Communicative Act

雑誌名：Studies in Language and Culture

巻：7

発行年：2019年

頁：印刷中

査読の有無：無

著者：Tetsuharu Koyama

発表表題：Covert Evasion in Avoidance-Avoidance Conflict Situations: A Preliminary Study of the Effect of Cognitive Complexity and Communication Style on Japanese Speakers' Message Choices

雑誌名：Studies in Language and Culture

巻：6

発行年：2018年

頁：43 - 64

査読の有無：無

〔学会発表〕(計2件)

1. 発表者（コーディネーター）：児玉一宏

発表表題（シンポジウム）：「英語学研究に基づく高校生・大学生のための学習英文法」

学会等名：日本英文学会関西支部第11回大会

発表年：2017年

2. 発表者：小山哲春

発表表題：Covert Evasion as Uncooperative Communicative Act: Theoretical and Empirical Analyses of Japanese Speakers' Message Choices in Avoidance-Avoidance Conflict Situations

学会等名：The 4th American Association of Pragmatics (AMPRA4) (国際学会)

発表年：2018年

〔図書〕(計2件)

1. 著者名：児玉一宏

出版社名：研究社出版

書名：『小学校英語内容論入門』（分担執筆）

発表年：2019年

総ページ数：227

2. 著者名：児玉一宏

出版社名：朝倉書店

書名：『認知言語学大事典』（分担執筆）

発表年：2019年

総ページ数：印刷中

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：山梨 正明

ローマ字氏名：Yamanashi Masaaki

所属研究機関名：関西外国語大学

部局名：外国語学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：80107086

研究分担者氏名：小山 哲春

ローマ字氏名：Koyama Tetsuharu

所属研究機関名：京都ノートルダム女子大学

部局名：人間文化部

職名：教授

研究者番号（8桁）：60367977

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：多田 保行

ローマ字氏名：Tada Yasuyuki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。